

幕末・明治、有田の発展に貢献した人々

当県人会常任理事 吉村照治（杵島郡出身）

●はじめに

今年、2016年は「日本磁器誕生・有田焼創業400年」に当たり、実にめでたく各地で多彩なイベントが繰り広げられている。



草創期の有田焼に関わった先駆者については、

- ① わが国で初めて泉山磁砦地を発見し、作陶を行った陶祖の李参平（1616年）
- ② 同時期、武雄から有田の稗古場に移り活躍した百婆仙（1630年頃・深海宗伝の妻）
- ③ 初めて磁器の赤絵付けに成功し、一躍名を馳せた初代酒井田柿右衛門（1647年）
- ④ 禁裏御用窯三代辻喜右衛門（1664年）

らが有名である。

江戸時代を通じ、有田焼は質や意匠の面から見ると、17世紀後半が最も優れている。この時期は名工と言われた柿右衛門や喜右衛門らの活躍によって、焼き物に対する勢いと多様性が感じられる。18世紀から19世紀にかけても、それなりの特徴ある焼き物が製作されたが、17世紀の様な躍動的で力強さは余り感じられない。

19世紀になると日本の主要な窯業の地・瀬戸や美濃でも磁器の生産が始まり、有田の独自性が薄れていった。1860年代、世界万国博覧会時代が到来。鍋島藩は有田の優れた美術作品を出品。第2回パリ万博（1867年）で高い評価を得て、有田飛躍のバネとしたことの効果は大きい。幕末・明治、陶郡有田の近代化・国際化に努め、有田を世界的規模に広め、尽力した先人達にスポットを当て若干所見を述べてみたい。

有田焼の様式は、大きく3つに分類される。

- ① 古伊万里系（江戸初期の古い有田焼）
- ② 柿右衛門系
- ③ 鍋島藩窯系

である。東南アジア・ヨーロッパへの海外輸出は1650年代に始まり、再興は幕末・明治に盛んになった。

●貿易商 久富与平（与平昌起）

19世紀の有田皿山に「久富の有田」と呼ばれた時期があった。中の原の豪商・久富昌起（二代与次兵衛の末子）は、「白眉の傑物」と言われ、

頭彰碑が稗古場の曹洞宗報恩

寺境内に建っている。碑はクジラの石造の上に乗っており、その形状が珍しい。

天保11年（1841年）、鍋島藩は久富家にオランダ東インド会社との取引を許可し、「蔵春亭」の屋号を与えている。これは久富家の積極的な商略と文雅な家風を評してのことだった。久富家は新しい試みとして、泉山磁石に熊本天草石を混ぜたり、釉薬の原料に網代石を使用したりしている。「蔵春亭」は次第に総合商社の性格を深め、明治2年（1869年）、我が国の北方における海運・取引を計画。明治4年、船が台風に遭い難破漂流。昌起は北海道厚岸海岩の船中にて41歳の若さで病死。「クジラにまたがって世界貿易の初志を貫徹したい」と言い残し、壮大な夢を抱き活躍した人と言える。



有田稗古場「報恩寺」の境内に建っている「久富与平昌起」の碑

●貿易商 田代紋左衛門

有田本幸平の生まれ。中の原の久富与次兵衛に次いで貿易商の鑑札を鍋島藩から受け、外国向けの磁器製造販売を許されている。万延元年（1860年）から一時期、有田焼輸出の利権を占有したとまで言われた。長崎での仕事は弟や長男に担わせたが、平戸藩三川内で作らせた生地の有田で絵付けをした磁器を輸出、地元窯焼と対立。慶応2年（1866年）皿山代官に訴えられ、田代と赤絵屋は処罰された。明治以降はさらに事業を拡大し、長崎・上海・横浜・神戸に支店を設け、明治前期の有田焼輸出に貢献している。明治2年、有田郷が飢饉に見舞われたとき、東北から米を買い入れ、陶山神社の広場でそれを原価で売り、感謝されている。明治9年、長男助作は、国際化のシンボルとして有田に和洋折衷の異人館（接待・宿泊施設）を建て、外国との交流に尽力している。紋左衛門は明治32年、84歳で死去。

●香蘭社の創業者 八代・深川栄左衛門

田代が貿易を独占している頃の幕末、有田では